

ともに学び ともに考え 実践する 学校組織の開発

～支援教育の推進を通して～

学籍番号 229119

氏名 信田 千尋

主指導教員 田村 知子

副指導教員 佐々木 靖

1. 問題の所在と研究の目的

1.1 研究の背景

特別支援教育は、平成19(2007)年に学校教育法が改正され、障がい児教育の制度は、それまでの特殊教育から特別支援教育へと転換された。特別支援教育に移行してから、障がいのある幼児児童生徒に対する教育の充実が進められてきた。

一方、特別支援学級に在籍する児童生徒数は年々増加している。また、全国の小・中学校の通常学級において、知的発達に遅れはないものの、学習面・行動面において著しい困難を示す児童生徒の数も増加していると明らかにされている。これらのことから、障がいのある児童生徒に対する指導や支援を充実させること、そして、通常の学級に在籍する支援が必要な児童生徒に対しても支援を充実させることが必要である。そのためには、教員の専門性を高めたり、校内全体で意識をもってとりくんだりすることが重要であると指摘されている。

1.2 実習校の現状と課題

実習校では、報告者が着任した2020年度の支援学級在籍児童数は21名であったが、2021年度は22名、2022年度は29名、2023年度は32名と支援学級在籍児童の数が年々増加している。それにもかかわらず、支援が必要な児童のことに周りの方の教職員と情報共有するような機会はほとんどなく、支援が必要な児童の対応を支援学級担任に任せるなど、校内の支援教育における体制が十分に構築できていないように感じた。また、実習校の支援学級担任は今まで一部の担任に偏っていたため、ほとんどの教員は支援学級担任の経験がなく、支援を要する児童の理解や知識が十分に備わっていないようにも感じた。これらのことから、教職員の支援教育に対する理解や意識の不十分さや組織的に対応にあたることに課題を感じてきた。

1.3 研究の目的

本実践研究の目的は、実習校の教職員が、支援学級担任であるか通常の学級担任であるかに関わらず、支援教育をともに学び、ともに考え、実践する組織へと少しでも近づけることである。支援学級在籍児童や通常の学級に在籍する特別な教育的支援が必要な児童が増加する中で、どのような働きかけをすると支援教育が推進するのか、また、支援教育に対して組織が学習し、機能するのか検討していく。

2. 実践

2.1 基本学校実習でのとりくみ

まず、教職員が実習校の支援教育の現状についてどのように感じているのかを知るために、支援学級担任および通常の学級担任の両方の担任経験がある教員にインタビューを行った。インタビューから3つのことが明らかになった。具体的には、①通常の学級担任が支援教育のことや支援を要する児童の実態を十分に理解できていないこと②支援が必要な児童のことについて話し合えるような時間や機会が十分確保できていないこと③支援教育の推進には周りの人との温度差があったり、学校風土も影響したりしているのではないか。ということである。これらのことから、教職員の支援教育についての知識や理解を向上させたり、ともに考えたり、実践したりするとりくみを行っていくことの必要性を感じた。そこで、支援コーディネーターと一緒に、UD(ユニバーサルデザイン)スタンダード(支援教育の手引書)を作成し・配付した。このとりくみによって、支援の視点をふまえた実践を行う教員が少し出始め、実践した感想では、肯定的な意見が聞かれたが、支援教育の視点をふまえた実践を普及させるまでには至らなかった。それは、UDスタンダードを配付にするだけでは、周りの教職員が実践への具体的なイメージを持ちづらかったことが推定される。

2.2 発展課題実習でのとりくみ

そこで発展課題実習では、基本学校実習での課題をふまえ、大きく2つのことにとりくんだ。1つ目は、職員会議でのUDスタンダードの解説である。これは、教職員の支援教育に対する知識や理解の向上を図り、より多くの教職員にUDスタンダードを読んでもらうことを目的として行った。解説を行ったことで、UDスタンダードに掲載されている支援方法を率先して行う教職員が増え、同僚の良い実践を模倣する教職員の姿も見られるようになってきた、2つ目は、自主学習会の開催である。これは、教職員間で、支援が必要な児童のことについて情報共有し、支援方法一緒に考えることと教職員同士のつながりを深めていくことを目的で行った。初めての開催にも関わらず、多くの教職員に参加してもらうことができた。自主学習会では、支援が必要な児童の支援方法について、効果的な支援方法を共有してくれる教員もおり、支援教育について一緒に考えることができた。

3. 考察

本実践研究において、UDスタンダードを作成・配付したことで、支援教育の視点をふまえたとりくみが広がっていくきっかけとなった。また、UDスタンダードの解説をしたり、自主学習会をしたり学びあう機会をもったことで、支援教育の視点をふまえた実践を行う教職員が増えた。少しずつではあるが、教職員の支援教育への知識や理解が向上し、見方や考え方が変容してきたように感じている。支援学級と通常の学級の枠を超えて教職員が支援教育を語り合えるようになってきた。しかし、支援教育の推進には、知識や理解の向上だけでなく、校内連携や校内体制の構築などすべてを有機的に結び付けることが重要であると感じている。今後は校内体制の構築等についても検討し、引き続き実習校の支援教育推進に向けて尽力していく。